

そらと地上との対話

——「めくらぶだうと虹」のひとつき——

はじめに

「めくらぶだうと虹」(以下ルビを省略)に登場するめくらぶだうの、その呼称は、「野ブドウの方言」⁽¹⁾であるというが、本論では以下それを野ぶどうと呼ぶことにする。「城あ」とのやぶに「熟れ」た実をつけて息づくこの野ぶどうが天空の虹とともにすごしたひとときを語る物語は、宮澤賢治の構想した『花鳥童話集』の一篇、「その代表としてよく童話選集にも収められる」と伝えるテキストの「解説」⁽²⁾は、主役のほかに「《もず》と《ひばり》という二種の鳥にそれぞれの役がふりあてられていること」に注意している。見逃せぬ指摘だと思う。すると、鳥ではないが、最初に「一寸」姿を見せる野嵐も気になる。

「解説」はなお「冒頭第一行に《おほばこ》《赤つめ草》《粟》^{あは}という三種の植物の《花↓結実↓死》の三相が示されていること」をも、読み解く。文中の《花》はあとの二相との関連で《開花》を意味するとみられよう。

「三相」は成長したすべての植物のたどる変化の過程であって、それを第一行に読むことは、物語が虹と出会った野ぶどうのなりゆきをいかに見つ

めるかを探るひとつの視点の提示として、興味深い。けれども、そこに果たして「三種の植物」と植物そのものの「三相」(以上二個所の傍点ともに引用者)との対応関係が、求められるのかどうか。物語の告げるのは、「城あとおほばこの実は結び」・「赤つめ草の花は枯れて、焦茶色になり」・「畑の粟は刈られ」た事実で、相とすれば結実と枯死と、そして刈りとられることとなる。刈られましたに《死》のニュアンスが認められなくはないが、わたしにそれはすぐはない。人間の刈取り＝収穫の営みを、植物における《生の完結》とみるのは、やはり人間的な受け留めにすぎないだろうか。それにしても、「冒頭第一行」には《開花》の相は示されていない。赤つめ草の「花」は、いきいきと開いておらず、すでに「枯れて焦茶色」なのである。それゆえ、《花↓結実↓死》の提示をそこに求めるのは無理だ、と思われる。あるいは「《おほばこ》《赤つめ草》《粟》^{あは}」のひとつひとつが「三相」を表わす、というのであろうか。しかし物語のすなおな読み手としては、「三種」が「三相」を示すといわれたら、それぞれの対応が指摘されていると受け留めるのが、定道だろう。

ならば「三種の植物」の在り方は、何を告げるとわたしはみるか。用意したのはきわめて単純な読みだが、それについては、物語のはこびをたど

遠藤 祐

りつつ、次に触れることにしたい。

1 「めくらぶだうと虹」の〈はしがき〉と〈あとがき〉
ならびに物語の〈発端〉と〈結末〉

「めくらぶだうと虹」は、テキストで数えて五ページ弱。短い物語だが、ひとつのエピソードを単純なかたちで告げる、といった作品ではない。宮澤賢治の他の物語たちと同様、きっちりと構造化されているところが、わたしの興味をひく。「双子の星 一」やおなじく「二」、「鳥の北斗七星」などとともに、「めくらぶだうと虹」もまた、〈三〉を基数とする語りによってこぼれる物語なのだ。「城あとのおはばこの実は結び……」とはじまり、「空は銀色の光を増し、あまり、もすがやかましいので、ひばりも仕方なく、その空へのぼって、少しばかり調子はづれの歌をうたひました」と閉じられる「めくらぶだうと虹」のすべては、物語の〈はしがき〉と、物語そのものと、物語の〈あとがき〉との三部から成る——という〈事実〉を、第一に把握する必要があるだろう。順序は前後するけれども、いまひいた最後の一文が〈あとがき〉にはかならないことを、さしあたり確認しておきたい。最後の一文の告げるのは、銀色の空と、そこに鳴き騒ぐもずと、そのやかましさにじっとしてられず、空にのぼって「調子はづれの歌」をうたうひばりの姿だが、三者の織りだす情景はありふれた日常のそれであって、そこに特殊な気配は感じられない。すなわち「めくらぶだうと虹」の伝える意味深いひとときは過ぎ去ったわけで、だからこそ最後の一文は〈あとがき〉と見なされることになる。とくにいままで触れられなかったひばりの在り様が言及されたところに、物語は終わったとの印象が

強い。事情を知る読者と違って、ひばりには、どうしてもすがやかましいのかはわからなかったはずだ。

語りのはこびのうえで、〈あとがき〉のひばりの存在は、物語そのものを隔てて、〈はしがき〉に顔をだす野鼠と対応する、と見られよう。「刈られたぞ」のひと言を地上にのこして、すぐ穴にひっこむ野鼠も、二度と物語空間に姿を見せず、したがって野ぶどうと虹がともにしたひとときのことは、何も知らないのだ。その意味で、彼はひばりとひとしく物語外の登場人物なのである。そういう存在を点出する最初の一段は、だから、物語が動き出すまえのその場の在り様を示す〈はしがき〉なのだ。あらためてそれを具体的にみてみよう。

城あとのおはばこの実は結び、赤つめ草の花は枯れて焦茶色になり、畑の粟は刈られました。「刈られたぞ。」と云ひながら一ぺん一寸顔を出した野鼠が又急いで穴へひっこみました。

崖がけやほりには、まばゆい銀のすすきの穂が、いちめん風に波立ってゐます。

その城あとのまん中に、小さな四つ角山かくやまがあつて、上のやぶには、めくらぶだうの実が、虹のやうに熟れてゐました。

物語の成りたつ場、すなわち「城あと」の様子を、語りは三節に分けて伝えている。「畑」は「城あと」の一部がたがやされたものだろう。それぞれの節の告げるのが何かは、すなおに読めば誰にもすぐわかるはずだ。おおばこ・赤つめ草・粟と野鼠、銀のすすきの穂、野ぶどうの実——それらはいずれも、物語の〈いま〉が晩秋のある一日であることを示す標識と受

け留めていい。粟が収穫されたのを自分の眼で確かめた野鼠の、思わず口にしたセリフ「刈られたぞ」には、折角の御馳走を持っていかれた口惜しさがにじむのを、聞きのがしてはなるまい。やがて主役をつとめるはずの野ぶどうも、ここではまだ晩秋の風物のひとつ以上に見られてはいない。ただ、熟したその実の様が「虹のやうに」と形容されるところに、あとはこびとのかかわりを思う語りの意識が、わずかにのぞく。それとも、〈はしがき〉の終わりに、しかも物語空間の中央、「小さな四っ角山」のやぶに、野ぶどうを登場させることで、語りはさりげなく主人公を紹介したつもりなのだろうか——正直にいつてわたしは迷う。だが、いずれにせよ次の接続詞、話題の転換を告げる「さて」によって、新たな情況が導かれ、物語は確実に動きます。

「さて、かすかなかすかな日照り雨が降りましたので……」と語りだされる物語のなりゆきをたどるに当たって、読者はさらに二個所の接続詞、「そこでめくらぶだうの青じろい樹液は……」と「そして、今はもう……」とに、注意しなければならない。どちらも、「さて」とおなじく、或る情況を伝える一連の語りの先頭にたち、「そこで」は事からの因果的継起、「そして」は並列的継起の関係を示して、話題を転じる「さて」とともに、物語情況そのものの推移を促すように働く。だから注意が必要なのだ。⁽³⁾すると、物語そのものも、〈発端・展開・結末〉という三段のはこびをもつことが、明らかになる。〈発端〉と〈結末〉の情況を、まずうかがってみたい。

「さて」に導かれた〈発端〉になにが起きたか。言い換えれば、物語はどのようにして動きはじめたか。語りがそこに告げるのは、第一に「かすかなかすかな日照り雨」、幼時のわたしの言葉で言えばお天気雨が「降り」

そして「霽れ」たこと。雨の落ちた時間はごく短いだろうが、その間「向ふの山」は「暗くなり」、はれると「明るくなって、大へんまぶしさに笑ってゐる」という。第二にもすが物語空間に姿を見せたこと。彼らは「まるで音譜をばらばらにしてふりまいたやうに」城あとに飛来して、「みんな一度に、銀のすゝきの穂にとまり」、野ぶどうはそれを眼にして「感激し」たという。そして第三に虹の登場。「東の灰色の山脈の上を、つめたい風がふつと通って、大きな虹が、明るい夢の橋のやうにやさしく空にあらはれました」と語りはいう。

虹が現われたのは、「山脈」の見える「東」の空だ。ではもずはどの方角から来たのか。「そっち」すなわち「向ふの山」の方からとあって、その山も「山脈」の一部と思われるゆえに、もずも虹の現われた東の方から飛来したわけだ。物語の終わり近くに、すすきの穂から飛びたったもずが「東の方へ飛んで行きました」と語られているのを、ここに思い合わせるべきだろう。虹は「日光が空中の雨滴で屈折・反射してできる」現象⁽⁵⁾。それゆえ、〈発端〉の「日照り雨」は、主役の一人である「大きな虹」登場の道を用意した出来ごとにはかならない。もずがもともと虹とかかわりを持つ鳥なのかどうかは、知らない。としても、彼らは虹の出現直前に東の方からやってきた点が、注意されている。しかもその姿形を「音譜をばらばらにしてふりまいたやうに」と形容されるわけだが、この喩は同時に高く鳴きながら飛ぶ様をも、伝えているはずだ。いま一度あとの東へ飛びゆく場面を参照すれば、「気違ひになつたばらばらの楽譜のやうに、やかましく鳴きながら……」との語りのあることを、忘れてはなるまい。すると、少なくとも「めくらぶだうと虹」の物語では、もずは、主役登場を合図するファンファーレを吹き鳴らす先触れの役をつとめている、と理解できよ

う。こうした条件が調ったところで、東の空に「大きな虹」が姿を現わし、「やさしく」地上を見おろす。物語にも、天空と地上との垂直のかかわりの成立する態勢が調ったのである。「明るい夢の橋のやう」である虹の姿は、城あとのやぶの野ぶどうをみずからにつなぐ想いを、おのずから示すとみることができる。

〈発端〉のそのようなゆきを踏まえて、語りは「そこで」と物語情況を〈展開〉へと導き、虹と野ぶどうとの交歓の次第を、おもに二人の対話によって伝えたいので、〈結末〉の段に到り着く。

「めくらぶだと虹」の物語の〈結末〉は次の一行——「そして、今はもう、すっかり消えました。」句読点をいれてわずか十九字、あまりに短く、物語のはこびを支える一段との認定にたえられるか、どうか。だが、これは一行一段落、その意味で自立した語りにほかならず、しかも先頭の「そして」に、〈はしがき〉と物語本体とを区別する「さて」の場合とひとしく、読点の付されているのが見逃せない。それは、「前の事柄に、後の事柄が並列的に附加されることを示す」⁽⁶⁾この接続詞の機能を際立たせるための措置であるだろう。口述するなら前後に少し間をおき、「そして」にアクセントをつけて言うことになるこの一行の存在は、だからこそ物語のなかで、短くはあっても重厚さを感じさせるのである。それは、「そして」のあとに、「今はもう」の修飾節と、「すっかり消えました」の述部とをもつ。しかし実はそれだけではない。一行にはなお、隠された何かがあるはずだ。そこにみえなくても、前からの脈絡で誰にもすぐわかる「虹は」の一語——したがって〈結末〉の情況も、主語・修飾節・述部の三節の語りによって提示されていると認められるところに、注意したい。

「そして」が導くのは、ひとつの単純な事実、虹が物語空間から姿を消

した。ことはっきりと語られるゆえにかえって重みをもつ、ともいえるそれは、明らかに虹と野ぶどうとの対話の終了を告げている。だから「今」とは、物語そのものが終わりを迎えたトキにほかならない。ただ読者の気になるのは、その「今」野ぶどうはどうしているか——だろう。しかし語りはそれに触れていない。虹が空に現われたときには、「そこでめくらぶだうの青じろい樹液は、はげしくはげしく波うちました。」以下六行を費して、精細に野ぶどうの在り様をたずねたのに、「今」そのなりゆきを気にする気配すら示さないのは、なぜなのか。「今」までのなりゆきから考えて、黙殺したとはとても思えない。あるいは、虹に去られて悲嘆にくれる野ぶどうの姿に、触れるに忍びなかったか。だが野ぶどうが「今」打ち萎れて地上にのころのかどうかは、定かでない。いや、もし哀れな様でいたとしたら、語りはむしろ、それに触れずにはいられなかったのではなからうか。ならば読者は何ごとを読み取るべきだろう？ 虹の行方だけが坦々と告げられるところに、安心して、当面の事態に臨む語りの姿勢を、わたしは見いだす。あれほど歓迎迎えた虹との別れは、もちろんつらいに違いないが、この世の〈真実〉を証する、愛に満ちた虹の言説は、野ぶどうの裡に浸透して、「虹さん。私をつれて行って下さい。どこへも行かないで下さい」と「高く叫ぶ彼（あるいは彼女？）とともに在り続けることを、読者は誰も疑うまい。どれほどつらくとも、野ぶどうは、それでくずおれてしまうことなく、城あとの真ん中になお「輝いて」立てるはずだ。心配はいらない。その次第がわかっていゆるゆえ、語りも心置きなく東の空に眼を向けることができるのである。

2 対話の成り立ちならびにその前半

《発端》に続く物語の《展開》の段に経過するのは、虹が「空にあらはれ」てから「すっかり消え」るまでのひととき、いま正確には測れないがせいぜい一時間半ほどであろうか。ただし、虹自身の言葉に従えば、「ほんの十分か十五分のいのちです。たゞ三秒のときさへあります」となるけれども、それではあまりに短すぎよう。自分がいかに「たよりない」ものかを、虹は強く示したかったに違いない。としても物語の《とき》は確かに長くはない。にもかかわらず「めくらぶだうと虹」のそれは、「雁の童子」(以下ルビを省略)の場合とひとしく、かけがえのない、貴重なひとときなのである。西域の砂漠の南縁にある小さなオアシスのほとりで、巡礼の《私》がたまたま出会った、おなじく巡礼の老人から聴いた、天童子の《受難》と《帰天》のなりゆきを、そのままに伝える「雁の童子」はまた、最後の訣れの挨拶に《私》が口にするように、老人との出会いの「たゞ一時」を告げる物語でもある。「楊で囲まれた小さな泉」での昼さかりのひとときは、やはり二時間ぐらいと短い。だが、その間に生じた事態は「かりそめの事ではない」という。なるほど、天童子の《物語》を介して、「無上菩提」の聖域を志す二人の絆が確認されたのだから、ひとときも限りなく意味深い時間であるに違いない。あるいは、物語空間に聖なるもの「善逝」の影が射して、地上のときが永遠の光をおびる物語を、「雁の童子」に求めてよいか、とも思う。その意味で、虹の言説とおして「まことのちから」「まことのひかり」が地上に及び、「城あと」の中央、「四つ角山」のあるところを、二人だけの特別な・非日常の空間に変えるひととき

きを伝える「めくらぶだうと虹」⁽⁷⁾は、それゆえ「雁の童子」に通じる性格をもつ物語——と認められよう。

虹の登場を受けて「そこで」と語りだされる《展開》の段には、何がどのように示されるか。「雁の童子」でこの次第が、《物語》の語られるきっかけと、老人の語る《物語》そのものと、老人と《私》の訣れの情況とに分けて、伝えられるように、「めくらぶだうと虹」でも、語りは虹と野ぶどうをめぐる情況について、次の三つの事がらを示す、——まず地上の呼び掛けと空からの応答によって、対話の糸口がほどこけたこと、続いて対話そのものがどうであったのか、そして出会いのひとときの終わり、すなわち別れのトキの近づいたこと。

《展開》のはじめに、「そこで」東の空を仰いだ野ぶどうの姿が、大きく写しだされていることを、先に注意したけれども、虹を認めた野ぶどうの裡に「樹液」が「はげしく波うちました」と語られる様子は、人間にすれば、胸をどきどきさせて、というところか。その野ぶどうの在り様を、語りは、「さうです。今日こそ、たゞの一言でも、虹とことばをかはしたい、丘の上の小さなめくらぶだうの木が、よるのそらに燃える青いのはよりも、もっと強い、もっとかなしいおもひを、はるかの美しい虹に捧げると、たゞこれだけを伝えたい、あゝ、それからならば、それからならば、実や葉が風にちぎられて、あの明るいいつめたいまっ白の冬の眠りにはひつても、あるいはそのまゝ枯れてしまつてもいいのでした」と、告げている。⁽⁸⁾三人称でありながら、あたかも野ぶどう自身直接にその想いを口にするかのような語り口が、興味深い。次々と畳みかけてものを言う、切迫した口調は、話者の胸の鼓動をさながらに伝える、といった趣きをもつ。しかも、傍点の語に注意すれば、ここに明かされた野ぶどうの、虹への篤い憧憬と

熱い思慕の情は、日ごろから裡に秘められていたものとわかる。「今日こそ」彼はそれを相手に告げる機会に恵まれたのであって、晩秋の「城あと」のひとときが「へかりそめ」のものでない所以を、そこにも求めることができるだろう。

さらに、自身の「おもひ」を虹に伝えた「それからならば」、わが身は「冬の眠りにはひつても、あるいはそのまゝ枯れてしまつてもいい」という野ぶどうの心の動きも、見逃せない。なぜならそれで、続く呼び掛けの言葉には、彼の全存在、生命のすべての托されていることが、明らかとなるからだ。「虹さん。どうか、一寸こつちを見て下さい。」——緊張のあまり「しはがれた声」の、しかも「風に半分とられ」たその叫びは、無事、相手に届いて、「やさしい虹」の応答、野ぶどうに向けられたその「大きな碧い瞳」とともに、「何かご用でいらっしゃいますか。あなたはめくらぶどうさんでせう。」との確認の言葉がもたらされるのだ。こうして対話の糸口がほどこけ、二つの魂は交流の端緒をつかむ。このときひとつ気になるのは、野ぶどうを観る前の虹の視線の行方である。「うっとり」と西の碧いそらをながめてゐた」とあるけれども、なぜそちらに眼を向けていたのだろうか？「西の碧いそら」に、魂を奪うような何かがあったのか。そして野ぶどうに注がれた「大きな……瞳」が「碧い」のは、「そら」の「碧さ」が宿つたためだろうか。

自然現象としては、そこに虹の光源である太陽が輝いているはずだ。すでに西に傾いたそれ——だから物語の時刻は夕暮れに近い——は、虹を空に現わすもの、生みの親といってよい。すると虹の姿勢もうなづけるわけだが、しかしそれにしてもわたしに、なぜ？の問いはなお消えない。

「めくらぶどうと虹」のはじめから終わりまで、何処にも太陽の姿が示さ

れていないのはなぜなのか——と、不思議に思う。示す必要がなかったか、あるいは触れることが避けられたか。対話の後半に「まことのちから」を、「かぎりないのち」を、「まことの瞳」を、「まことのひかり」を説き、そして福音書の「野の百合」に言及するその在り方に注目すれば、西の空に何を虹がみつめたか——の想像がつく。「碧いそら」に在るのは、たんなる光源としての太陽ではなく、すべてを創り、すべてを生かす至高の存在であることが、野ぶどうに与えられた虹の言説から、読みとれるはずだ。あるいは、虹の「瞳」が夕日の輝きに、はかないものと見える《野の草》をさえ《かく装ひ給》うとイエスの伝える《神》の臨在を観たと認めてもよい。「めくらぶどうと虹」にかぎらず、物語一般で虹は「神のお告げ、契約、苦難の終り、祝福を表す」ものにはかならず、ここに想いあわすべきだろう。「やさしい虹」が説くのは、《神》に托された預言と受け留められるのではなからうか。虹の「瞳」が西の空とともに「碧い」のは、その預言者としての性格を示す標識なのだ、と思われる。虹のこの姿はわたしの想像を、「ヨハネの黙示録」にある《緑玉のごとき虹》のイメージに導く。《緑玉》は《エメラルド》にはかならない。ちなみに、その《虹》の取りまく天の《御座》に《坐し給ふもの》の状は碧玉・赤瑪瑙のごとくであった、という。

《展開》のはじめの場面を、このように読み解くと、「めくらぶどうと虹」のはじめに太陽の所在が触れられていない理由も、納得がいく。語りは、野ぶどうとあわせて、「神のお告げ」を伝える虹に注目すればそれでありである。

では、次に移ろう。《展開》の第二の場面——そこでいかなる対話が、

いかにして交わされたか。虹の〈応答〉に接したとき、野ぶどうは「まるでぶなの木の葉のやうにプリプリふるへて、輝いて、いきがせはしくて思ふやうに物が云へませんでした」と、語りは告げている。また、その野ぶどうの姿を認めて、「虹は大きくといきをつきましたので、黄や葦すいれは一つつつ声をあげるやうに輝きました」とも、言う。緊張と安堵との対照が鮮やかだが、双方がともに〈輝いた〉ところに、出会うべき相手に出会えた二人を結ぶ確かな絆の生じた様を、みてとることができよう。そういう情況のもとで、何とか息を整えて言われた野ぶどうのセリフ、「どうか私のうやまひを受けとって下さい」にはじまる一連の対話をかたち造るのは、いまのそれを含めた野ぶどうの六個と、対応する虹の六個との計十二のセリフ。しかし、それらがそのままに提示される条りのちようどなかほどに置かれた一行、「虹は思はず微笑わらひました」を境に、対話の流れは前半と後半に分けられている。

対話の前半で、敬意をこめて語り掛けた野ぶどうに、「うやまひを受けることは、あなたもおなじです」と応じた虹の、続く「なぜそんなに陰気な顔をなさるのですか」という疑問の言葉が、まず気になる。せっかく念願を果たす機会に恵まれたのに、と読者も虹とともに不思議に思う。そのあとのセリフからも明るさは感じられず、虹との格差を意識しすぎる野ぶどうの、謙遜——というより卑下に近い姿勢が、前半に目立つ。自身に許された〈倅せ〉があまりにも大きく、信じられない心持なのであろうか。それゆえ虹は、「あなたはまだお若いではありませんか」「あら、あなたこそそんなにお立派ではありませんか。あなたは、たとへば、消えることのない虹です。変らない私です。……」と、相手を励まさなければならぬ。にもかかわず、地上の植物、限りある命を生きるわが身の在り様にこたわ

った野ぶどうは、「いゝえ、変ります。変ります。私の実の光なんか、もうすぐ風に持って行かれます。雪にうづまって白くなってしまひます。枯れ草の中で腐ってしまひます」と叫ぶ。そこに先ほどの語りの一行が置かれるのである。

思い詰めた野ぶどうの声音に接した虹の在り様を、語りは告げて、「思はず微笑わらひました」という。それにしても、二人の対話が続く場面に、一個所だけト書にひとしい文言の挟まれるのは、なぜなのか。語りはどうして虹の在り様に触れる必要があるのだろうか。その理由をたずねていまの一行に注目すると、傍点の「思はず」が眼に灼きつく。僅かな一語だが、物語のはこびのうえに軽からぬ意味をもつそれは、微笑が本人の意志とはかわりなしに、虹の顔に浮かんだことを示している。しようと思わずにするのは、おのれの〈無意識〉の領域にひそむ何かが、そうさせることだろう。ここでは、虹の裡なる神の言葉が、野ぶどうの痛切な嘆きの声に反応して、その心を落ち着かせるために、虹をやさしく微笑ませたのである。そういう情況の変化をかかえて、ト書めいた一行は対話の進行のなかほどに置かれている、と思う。だから後半の対話では、虹がおのずと主導権を握るにいたるのである。

3 対話の後半ならびにそのなりゆき

「思はず微笑わら」った虹の「えゝ、さうです。本たうはどんなものでも変らないものはないのです……」との発言にはじまる後半に交わされるのは、テキストで九行・七行・四行と続くその三つのセリフと、あいだに挟まれた野ぶどうの二つのセリフ。野ぶどうの方は、「けれども、あなたは、高

く光のそらにかゝります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌ひます」「私を教へて下さい。私を連れて行つて下さい。私はどんなことでもいたします」と、いずれも短い。しかも前半と違って、口調はおだやかで、切迫した息づかいは聞こえない。虹のもたらす「まことのちから」へまことの光に触れたものはへかぎりないのちを享ける——という言葉に、慰めと安らぎを見いだした心の動きを、そこにうかがうことができよう。だからこそ、虹とともに在るひとときは、希わしく、いつまでも続いてほしいへときなのであつて、野ぶどうは「私を教へて下さい。……」と、口にせずにはいられないのである。

虹が微笑みを浮かべつつ、諄々と説くところを、野ぶどうの身になって、いま一度聴いてみよう。この世の存在で「変らないものはない」という「事実」を告げた虹は、続いて「ごらんさない。向ふのそらはまっさをでせう。まるでいゝ孔雀石のやうです。けれども間もなくお日さまがあすこをお通りになって、山へお入りになりますと、あすこは月見草の花びらのやうになります。それも間もなくしぼんで、やがてたそがれ前の銀色と、それから星をちりばめた夜とが来ます。／その頃、私は、どこへ行き、どこに生まれてゐるでせう。又、この眼の前の、美しい丘や野原も、みな一秒づつづけられたりくづれたりしてゐます」と、変化の実態に触れたうえで、「けれども」と、変化の相がすべてを支配するのではないことを、告げている——「もしも、まことのちからが、これらの中にあらはれるときは、すべてのおとろへるもの、しわむもの、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないのちです。わたくしでさへ、たゞ三秒ひらめくときも、半時空にかゝるときもいつもおんなじよろこびです」。

神からのメッセーじをそこに聴くことができると思うけれども、それを

取次ぐ虹の七色はこのとき、一段と輝きをましたに違いない。「あなたは高く光のそらにかゝります。……」との野ぶどうの畏敬の言葉とともに、わたしの想像の眼におのずから、福音書に示されるイエス像のひとつが浮かぶ。「マタイによる福音書」によつて、それを示そう、《イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。斯て彼らの前にて其の状かはり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ》(第七章一―二節)⁽¹⁵⁾とあつて、そのイエスはモーセおよび預言者エリヤと語つた(同三節)という。虹をイエスに擬するつもりがあるわけではない。にもかかわらず、物語情況そのものはわたしの裡に、弟子たちの視た変容するイエスの姿を、否応なしに喚びさますところだ、注意されるのである。そして何よりも、次のセリフにみられる虹自身の福音書への言及が、わたしの想いを強く動かす。言及に不自然さは感じられず、虹にとつて福音書の記述が身近なものであることを、想わせる。

第二のセリフで、「それはあなたも同じです。すべて私に来て、私をかゝるかすものは、あなたをもきらめかします。私に与へられたすべてのはめことばは、そのまゝあなたに贈られます」と、へまことのちから」の顕現によつて二人はひとしい存在であることを明らかにした虹は、「ごらんさない」と野ぶどうによく考へてみるように勧めて、《山上の説教》⁽¹⁶⁾におけるイエスの言説のひとつ(「マタイによる福音書」第六章二八―三〇節)を参照しつつ、次のように言う——「まことの瞳でものを見る人は、人の王のさかえの極みをも、野の百合の一つにくらべようとはしませんでした。それは、人のさかえをば、人のたくらむやうに、しばらくまことのちから、かぎりないのちからはなして見たのです。もしそのひかりの中であらば、人のおごりからあやしい雲と湧きのぼる、塵の中のたゞ一抹も、神の子の

はめ給うた、聖なる百合に劣るものではありません」。先に、「西の碧いそらをながめ」る虹の姿勢を検討したとき、一度眼を留めたこの発言は、見なおすといささか趣旨が読み取りにくい。

周知のように、福音書のイエスは《野の百合は如何して育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ。榮華を極めたるソロモンに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らをや》⁽¹⁷⁾と説く。ソロモン王の榮華も、野の百合の花のひとつにも及ばない——と、《神》

の視点に即して、両者が較べられるのだ。ところが、虹は、福音書の一説を視野に置きながら、あえてその逆を、「まことの瞳でもを見る人」が、世俗の「人のたくらむやうに」、自身を「しばらくまことのちから、かぎらないのちからはなして」、「人のさかえ」を見た場合を、語っている。

次の「そのひかり」とは何かが問題だが、それは「まこと」を離れた視点を目指す、と解されよう。ここに示されるのは、もとより虹の逆説的な発想にはかならない。だが、この発言をとおして、虹は何を野ぶどうに伝えたのだろうか？ おそらく自分が生きていくうえでもっとも大切なものを見失なわないように、との間接的な戒めかと思うけれども、果たして野ぶどうに理解できたか、どうか。「私を教へて下さい」と言うのを見ると、どうも心許ない気がする。

第三の、すなわち物語空間にのこした最後のセリフに、虹は「いゝえ私はどこへも行きません。いつでもあなたのことを考へてあます。すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすむ人は、いつでもいっしょに行くのです。いつまでもほろびるといふことはありません。けれども、あなたはもう私を見ないでせう。お日様があまり遠くなりました。もすが飛び立ち

ます。私はあなたにお別れしなければなりません」と、野ぶどうに語る。傍点の部分は、「雁の童子」の〈私〉が老人に呈した感謝のセリフにある言葉、先にも触れた「いつれはもろともに、善逝の示された光の道を進み、かの無上菩提に至ることでございます」にかよう趣きをもつ。とともに、虹も〈私〉もそのあとわかれの挨拶を告げて口をつぐむところに、注意しておきたい。二作の語りの共通性をそこにも見いだせるからだ。もっとも「雁の童子」の二人の場合〈再会〉はほとんど期しがたいけれども、虹と野ぶどうとのあいだでは実現の可能性をもつ、と見られる点が、異なっている。それに「めくらぶどうと虹」の場合、傍点の部分を、やはり、神の預言と聴いてよい、ということをも、附け加えておく。

その言葉を伝える虹は、いま、城あとの野ぶどうとの出会いのひとときに、「まことのひかり」の射すことを、認めているに違いない。だから力強く、自分はどこへも行かない、「あなた」のそばにいて、「いつでも」見守っている旨を、示す。それは確かな〈真実〉であって、相手を安心させるための〈口実〉ではない。「けれども」、微笑みながらまず「本たうはどんなものでも変らないものはないのです」と言ったとおり、時とともに移ろうこの世の実相を識るゆえに、出会いのひとときの終わりに近づいたのを見て、〈別れ〉の挨拶を告げなければならない。そこに「もう私を見ない……」とあって、下に打消しをとまなうので「以後は決して」⁽¹⁸⁾の意ととられそうだが、そうではあるまい。この場合の「もう」は「間もなく。やがて」⁽¹⁹⁾の意に解した方が、虹の意思にかなうのではないか。「もすが飛び立ちます」とあるのも、日没だから巢に帰るためというより、自身の退場に合わせて「飛び立」つ、との予告を想わせて、おもしろい。読者は、ひとときのはじまりのもす飛来の場面を振り返るべきだろう。

虹が「私はあなたにお別れしなければなりません」と語って口をとじた直後に、「停車場の方で、鋭い笛がピーと鳴りました」と語りはいう。「笛」の音は列車の鳴らした汽笛だろうが、読者はここで、いままでたたずんでいた物語空間は、実は「城あと」すなわち人間たちの暮らす町の一部にはかならずぬことを、あらためて意識させられる。「笛」の音は、物語のはこびからいえば、出会いのひとときの終わりを告げる合図の役割を担う、と聞かなければならない。それはそうだけれども、「めくらぶだうと虹」のなかで、いまの語りの一行だけは、どうにもなじみにくい。美しい夢の領域からいきなり味気ない現実に引き戻されたときの無残の感が、わたしを打つからだ。合図は、現実の音、「鋭い」汽笛ではなく、別の自然のもの音であってもよかったのに、と思う。だが、物語の「事実」は、やはりそのまま受け入れるほかに、途はあるまい。

それにしても、「停車場の方」、換言すれば外界から、物語空間へ割り込んできたかの観を否めない「笛」の音は、「城あと」の情況を変えてしまふ。銀のすすきの穂にとまって、そこにいる気配すら感じさせなかったはずたちが、動く。彼らは「みな、一ぺんに飛び立って、気違ひになったばらばらの楽譜のやうに、やかましく鳴きながら、東の方へ飛んで行く」。その騒ぎのなかに、これも「笛」の音に心を急かされた野ぶどうの、思わず発した叫び声が、「虹さん。私をつれて行って下さい。どこへも行かないで下さい」と、高く響く。その声が届いたのかどうか——「虹はかすかにわらったやうでしたが、もうよほどうすくなって、はっきりわかりませんでした」と語りはいう。それは、あわただしい地上の様子に心をのこしつつ、次第に遠ざかっていく虹の姿を伝えているだろう。虹の「大きな碧い瞳」は、最初の呼び掛けに応えて野ぶどうの方に向けられてから、やが

て姿の消える直前まで、かわらず野ぶどうのうえに在った——という「事実」を、「めくらぶだうと虹」の読者は銘記しなければならない。短い物語は、しかしその「碧い瞳」が地上をみつめる「ひととき」の顕わす深い意味を伝えることに、生命を賭けている。

おわりに

書き洩らした幾つかの事からを、最後に補足しておこう。物語の舞台となった「城あととまん中」にある「小さな四つ角山」は、天主閣の建っていた跡と思われる。するとその「上のやぶ」の野ぶどう、物語の当事者の一人も「小宇宙」の中心にたつ、とみられなくはない。その野ぶどうが、虹登場の先触れとなるもずの飛来に接し、「感激して、すきとほった深い息をつき葉から雫をばたばたこぼしました」とあるのは、人間ならばさしずめ深く心を動かされ、感涙にむせんた、というところだろう。感激したのは、おそらく虹の出現を予感したからに違いない。虹と出会うものがほかならず野ぶどうであるのはなぜか——は容易に解きたい問だが、解くための手がかりをわたしは次の記述に見いだす。野ぶどうは「山野にごく普通に、あるブドウ科の多年生つる草」(傍点引用者)とのこと。したがってそれは、ありふれた平凡な存在として、すなわち特別ではない点に注目して、物語を選んだ人物なのだ、と思う。対話後半の第一のセリフに虹の口にする「月見草」が、(「おおまつよいぐさ(大待宵草)」の俗称で、四弁黄色筒状の花をつけるのは、人のよく知ることだろうが、「孔雀石」はあまり知られていない。「半透明ないし不透明、輝緑色」の鉱石で、「印章や彫刻品、置物などには高価な製品がつくられている」⁽²²⁾)という。

いまひとつ、ジェンダー (gender) の問題がある。わたしは虹と野ぶどうの性別に、かならずしもこだわらないし、決める必要があるとも思わない。けれども念のため二人の発言をたどり直すと、一個所だが、虹が「あら、あなたこそそんなにお立派ではありませんか」と語っているのに、気づく。紛れもない女性の言葉遣い。それゆえ虹は〈女性〉と、〈事実〉のうえで確かめられる。すると野ぶどうは、どうか。細かいことだが、今の虹の言葉の直ぐ前にある「いゝえ。私の命なんか、なんでもないんです」とのものの言いによって、〈男性〉と見なされるようである。

〔注〕

(1) 原子朗著『新 宮澤賢治語彙辞典』(東京書籍、一九九九・七 第1版第1刷)に據った。

(2) 本論の作品のテキストは、ちくま文庫版『宮沢賢治全集 5』(一九八六・三 第一刷)所収の「めくらぶだうと虹」を使用した。「解説」は天沢退二郎。なお引用文中の傍点は、すべて筆者の附したものである。

(3) 接続詞は、ほかに「又急いで」「それからならば」「繰り返して」「あるいはそのまゝ」「そして云ひました」(傍点引用者)と使われているが、それらはいずれも段落中であって、ひとつの情況の動きにかかわるにすぎない。なお登場人物のセリフに含まれる接続詞は、それぞれの人物の言表に所属するものゆえ、ここでは除いた。

(4) 物語では「もず」だが、注(1)の辞典の〈もず〉の項に、「おそらくムクドリ(棕鳥、スズメ目ムクドリ科)とモズを混同していたのではあるまいか。なぜならモズは群れで行動しないからである。賢治作品中のモズをムクドリに置き換えてみると、どれも生態的にぴったりする」との指摘がある。

(5) 『新潮 現代国語辞典』(新潮社)の〈にじ〉の項。

(6) 『国語大辞典』(小学館)の〈そして〉の項。

(7) 「そこで」虹を認めた野ぶどうが「樹液」をふるわせてから、「鋭い笛」の音が響く直前まで、語りの視点は二人のうえに釘付けされて、他の一切をかりみることがない点に、注意したい。その語り様はおのずから、虹と野ぶどうとのあいだに對話の交わされる場面が、周囲から隔絶された特別な空間にはかならぬことを、告げている。

(8) テキストの「解説」は、虹の姿を仰いだ野ぶどうの胸のときめきを伝える一節に注目して、「丘の上の小さなめくらぶだうの木が、よるのそらに燃える青いほのはよりも、もっと強い、もっとかなしいおもひを、はるかの美しい虹に捧げると、たゞこれだけを伝えたい」というあえぐような思慕の独白は明らかに恋愛感情とよぼはかないものであり、作品全体に清らかではあるが同時にエロティックな情念のゆらめきをもたらししている」と説く。この一節の示す憧憬の念が情念をとまなうのは確かだが、それにしても、そこに明らかな「恋愛感情」をのみならず、「エロティックな情念のゆらめき」までを、読み取っていいのだろうか。物語はそこまでは認めていない、とわたしは受け留める。ただそういう指摘のなされる事実に接すると、やはり虹と野ぶどうのジェンダーが気になるので、本文の〈おわりに〉で、検証を加えることにした。

なお「さうです」以下「枯れてしまってもいゝのでした」にいたる語りには、二つの視点(語るものと作中人物とのそれ)の「相互に重なり合う」情況が、認められる。そこに、「この現象は、ある小説の《物語り状況》において〈局外の語り手による〉要素と〈作中人物に反映する〉要素とが相携えて現われるときに、とりわけひんばんに観察される。この場合、描写される現実の知覚は媒体的人物の視点からなされるが、この知覚の内容を伝達するときには、〈局外の語り手〉の声も聞き取れるのであり、したがっ

てこの語り手の「視点」も、やはり読者によって、たとえ漠然とではあっても、心に留められるのである」と、F・シュタンツェル『物語の構造』

(前田彰一訳、岩波書店、一九八九・四第二刷)——〈第一章 物語のジャンル特性としての媒介性〉に説明される語りの在り方、「いわゆる体験話法」の具体例を、求めることができよう。「体験話法 (erlebt Rede)」についての〈訳注11〉も、理解の助けとなるので、引いておく——「英語では free indirect speech (自由間接話法)。作中人物の言葉を、直接話法や間接話法によらず、語り手の声にかぶせて再現する手法で、これにより語り手と作中人物の声 (視点) が二重化される」(二四ページ下段)。

- (9) 「マタイによる福音書」第六章三〇節を参照した。引用は『舊新約聖書』(米國聖書協会、一九一四年)に據る。

- (10) アト・ド・フリース著／山下主一郎他訳『イメージ・シンボルの事典』(大修館、一九八四・三)の〈rainbow 虹〉の項。

- (11) 第四章第三節。引用は注(9)とおなじ聖書に據る。

- (12) 『聖書 新共同訳』(日本聖書協会、一九八七)では、前注の個所が《エメラルドのような虹》となっている。

- (13) 「ヨハネの黙示録」第四章二・三節に、《視よ天に御座設けあり。その御座に坐したまふ者あり。その坐し給ふものの状は碧玉・赤瑪瑙のごとく、かつ御座の周圍には綠玉のごとき虹ありき》とあるのを、参照した。《碧玉・赤瑪瑙》は『聖書 新共同訳』でも《碧玉や赤めのう》である。

- (14) 注(5)の辞典の《おもわず》の項に、「無意識のうちに」とある。

- (15) 引用は注(9)とおなじ聖書に據る。

- (16) 『聖書 新共同訳』の小見出しを借りた。

- (17) 注(9)とおなじく、「マタイによる福音書」の第六章二八・三〇節。

- (18)・(19) 注(5)の辞典の《もう》の項。

- (20) 平凡社『大百科事典 11』の《ノブドウ 野葡萄》の項(村田源執筆)。

- (21) 平凡社『大百科事典 4』の《くじゃくいし クジャク(孔雀) 石》の項。執筆は柿谷悟。

- (22) 前注におなじ。執筆は近山昂。

(えんどう たすく 元本学教授)